

子どもの権利・教育・文化 全国センター

ニュース 第21号 2007年9月12日

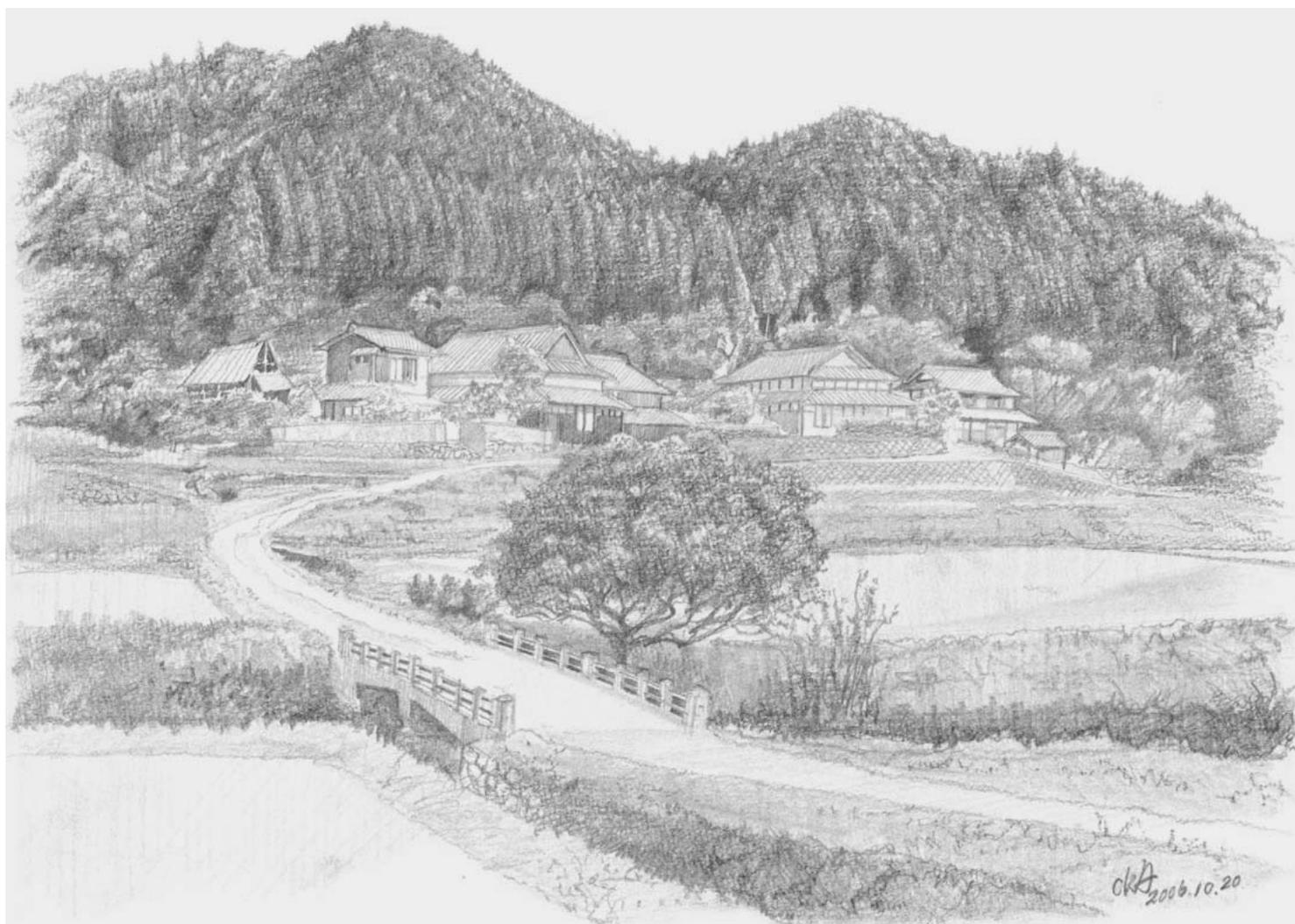
子どもの権利・教育・文化 全国センター

〒102-0084 東京都千代田区二番町12-1 全国教育文化会館5F

TEL 03-5211-0133 FAX 03-5211-0134

ホームページ <http://kodomo.p-web.biz/>

メールアドレス kodomo@kodomo.p-web.biz



画・岡本正和

全国の教職員・父母が元気をもらった 「教育のつどい2007」

本田久美子（子ども全国センター事務局長、全日本教職員組合執行副委員長）

「みんなで21世紀をひらく教育のつどい—教育研究全国集会2007」は、8月16日から19日までの4日間、被爆地広島市を中心に開催されました。4日間を通じ、延べ7000人の父母・教職員・子どもたちの参加で、大きく成功しました。とくに開催地広島にふさわしく「教育のつどい」全体に平和というテーマが貫かれていました。

開会全体集会の記念講演渡辺えり子さんは、「未来をつくる—平和へのメッセージ」と題して、ご自身のお父さんの戦争体験から「生まれてくるはずだった多くの生命に代わって今、生きている私たちが伝えなければならない」と語り「ゼロ戦をつくっていた少年だった父が教師になった、その思いを受け継いでいきたいと思います。」と、話を締めくくられました。

また現地の企画、合唱構成「ヒロシマからのち輝く明日へ」は、参加者に多くの感動を呼びました。それまでに何度も練習し、当日は170名をこえる子ども・父母・教職員・市民の方々が、舞台上に立ちました。合唱構成の中で子どもたちが語ります。「日本は戦争しないと決めました。私はずっと守ってほしいです。」「世界中の子どもたちが平和でありますように。僕の願いはきっとかなう。みんなの願いだから。」

合唱構成の最後、広島の中学校の平和学習の中で生まれた歌「ねがい」が歌われたときは、会場と一体となって平和の大切さを共有しました。

2日目からの29の分科会は、教育基本法が改悪されてはじめての分科会ですが、「教育のつどい2007」のテーマのひとつである「憲法の精神にもとづき、子どもの権利条約を生かし、教育をみんなの力でつくりあげよう」

にふさわしく、どの分科会も熱心に子どものこと、学校のことが語られ、教室で積み重ねてきた教育実践が報告されました。特に若い青年教職員の苦勞しながら失敗も含め報告されたレポートには多くの共感を呼びました。感想でも「初めて参加しました。全国でこんなにも熱心に実践されている先生がいる事を知り、とてもうれしい気持ちです。そして、どの実践に対しても真剣に意見を言い合える場にも感動しています。」「とても勉強になりました。体育学習で高めるべき体力とは何か、詰めた議論ができてよかったです。上からの押しつけで無理な体力トレーニングをしなくても、ていねいな教材研究のもと体育授業をていねいに行うことで体力は高まるというお話が心強かったです。」と若い初めて参加の先生が感想を寄せています。

4日目の「教育フォーラム」では、今の教育課題にふさわしい8つのテーマに分かれて話し合われました。どのフォーラムも、熱心に語り合わせ3時間があっという間に過ぎてしまいました。「全国一斉学力テストって何だったの？」のフォーラムでは、全国でただ1つテストを実施しなかった犬山市の校長先生が来られ、「犬山は、すべての子どもたちに学びを保障するために、学び合いの授業に取り組んでいる。学力テストで学び合いが保障できるとは思えない。だから、実施しなかったのだ。」と明確に語っておられました。

「教育のつどい2007」は、多くの財産を、父母・教職員にもたらしました。この財産を全国各地に持ち帰り、子育て・教育に生かしていくことが、何よりも大切ではないでしょうか。



合唱構成「ヒロシマからのち輝く明日へ」（開会全体集会）

おとなが知らない子どもの世界

「教育のつどい2007」の教育フォーラム「おとなが知らない子どもの世界——みんなで語ろう子どものこと——」は、ケータイ、ゲーム、インターネットと子どもの問題について話しあいました。3時間にわたるパネルディスカッションと会場討論では率直な意見交換がされ、私たちがとりくみたい課題も明らかになりました。(文責：編集部)

◆子どもの世界はいま — パネラーの発言から

鉄田塔子さん (小学生と幼稚園児の母親、広島)

アニメ「サザエさん」の世界を「いいな」と思う。息子が毎日野球をしていた公園が“野球禁止”になった。子どもの健全な世界がつかれなくなっている。頭ごなしでなく、子どもが失敗しながらもメディアとの接し方を考え距離をとっていきように育てるのが大事。親もコミュニケーションし、討論しあっていることを子どもに見せなくてはと思う。

榊原 拓さん (大学1年生、愛知しゃべり場)

確かにゲームはおもしろいが、高校ではやはり学校祭だと生徒会ががんばった。学校祭を1日削って6時間の授業をしても、そのほうが価値があるのだろうか。学校祭1日の価値を先生はどうしてわからないのかと思った。高校生は力があり余っているが使うところがない。先生が後ろ向きでは生徒もついていけない。ちゃんと説明すれば子どもも納得する。少しずつ認めてあげることが大切。

吉野啓一さん (高校PTA役員、元小学校教員、埼玉)

こわくて両親に甘えられない小学2年生。その苦しさを毎朝おなかが痛くなるという身体症状で訴える。親がなく施設から通ってくる子は「先生は帰る家があっついね。私さみしい」と。習い事のために、母親が学校帰りの通学路を逆走して迎えに来る小6の子。テストはもちろん、おしゃれも競争、英語、習字、習い事がことごとく競争。子どもたちは押しつけられ、させられることに拒否反応。思いを受けとめてもらえる快さに飢えている。

◆心を共鳴させるコミュニケーションを

坂本旬さん (法政大学)

なぜ子どもはゲームに夢中になるのか。ドラクエは島の中の探検・冒険が、ポケモンは虫取りがモデルになっ

た。子どもにとって最も必要な環境が奪われていて、それをバーチャルな世界で表現しているのがゲーム。そう考えれば、子どもがなぜ夢中になるかが見えてくる。

インターネット、ケータイなど様々な新しいメディアの出現によってコミュニケーションが活性化されるのではなく、ますます、コミュニケーション不全に。コミュニケーションとは単に言葉のやりとりではなく、むしろ、心を共鳴させ、感情を共有する場がつくれているかどうかが大事。メディアの環境をどうやってコミュニケーションの環境に変えるかが重要なテーマである。

インターネットとは市民社会がひろがったもの。市民社会の中で自分を表現する力、自分や他人の人権を守る力をつけさせなければならない。「メディアを批判的に見る力」とともに「表現する力」が重要だ。

◆子どもを収奪する社会をどう変えていくか

有原誠治さん (アニメーション映画監督)

メディアは便利で、遠くの人とつながる手だては援助してくれるが、ごく身近かな大切な人とどう向きあうかは、目的意識的な努力をしない限り保障してくれない。大脳の人間らしい発達は対面コミュニケーションでしか保障されない。全面的な発達を子どもにどう保障するか。

情報化社会を日本に持ち込んだのはアメリカの巨大資本の情報戦略。『日本の情報化社会、そのビジョン』(1969年)という本では、経済発達のためにはアメリカ流の情報戦略を日本に導入しなければならない、しかしそれは子どもの情操に重大な影響を与え病的な現象を引き起こすだろう、とまで予測している。テレビの時代になり、子どもの遊び道具が資本の収奪の世界に変わった。ヨーロッパの子ども番組は短く、コマーシャルがない番組もある。子どもを資本の収奪の道具にしてはいけないという社会的なルールがあるから。地域や家庭、学校の個別の努力はもちろんだが、同時に子どもを収奪する社会を

どう変えるのか、子どものための文化をつくりあげることとを共同でやらないといけない。

子どもたちの実態 —— 会場から

会場からは、「きちんと時間を決めて使える子どもも増えている代わりに、10時間以上もメディアに接触している子どもが増え、二極化している」「マンガの内容にも注目する必要がある。特に少女コミック誌は最後にセックスにたどりつくかつかないか、それが愛情だというようなものが」「家庭訪問に行った時、『お父さんがゲームしているので、先生ここでごめんなさい』と母親から言われ、玄関先で話した」「母親が家出し、父親も行方不明で6年生の女子が3歳の子どものを育てているという現実もある」など、子どもをとりまく深刻な実態が次々に。

「親が何時に帰るかわからず生活の必然でケータイを持っており、切り離せない状況もある。だから代わりになるもの、いろんな文化を含んだ集団を地域につくって

いく必要があるのではないか」との提案もありました。

こんなやりとりも

会場の年配の教師から、「学校祭では、いのちとか平和とか社会的な問題の発表ばかりがいいと考えるのは時代遅れだと思うのですが、“たまごせんべい”みたいなもんばかりでええんかなあ。榊原君に議論をふっかけてみたいんですが」と率直な質問が出され、ちょっとした緊張感が。榊原さんは「広島・長崎の原爆について調べたグループもあり、僕たちが忘れてはいけないことを文化祭でとりあげることは大事だと思います。また、楽しんでその場だけですませてしまうならお祭りの屋台できちゃうが、学校祭と屋台がちがうのは、準備にどれだけの時間をかけ、どれだけの仲間とつながりあい、協力しあってひとつのことを成功させるかに価値があると思います」と話し、さわやかな交流の一面もありました。



地域の異年齢子ども集団「少年団」

中村治子（兵庫県尼崎市大空少年団父母）

尼崎市には6つの少年団があります。小学生から中学生までが団員、高校生以上が指導員で、中学校区程度をテリトリーとして、公園での集団遊びを中心に、合宿やキャンプ、スケート、夜の野外映画会、子どもまつりへの出店等の多彩な活動を行っています。

私の地域では武庫南小学校区が中心で、20年前に始まりました。小学校毎に置かれた学童保育は3年生まで。その後の子どもたちの居場所を模索していた中で、京都での少年少女組織を育てる全国センター（現少年少女センター全国ネットワーク）の集会に参加して感銘を受けた親が「とにかく大阪で企画している夏のキャンプに参加してみよう」と呼びかけて、指導員も、名前を貸してもらえる人を探してのキャンプ参加。3泊4日のキャンプを終えてからも子どもが覚えてきた歌や踊りをいつまでも楽しんでいる姿に、準備会を立ち上げました。先輩の団にお祝いされた団結成は4年後のことでした。

4年生で参加したわが子はもう結婚して青年指導員。一時期団員がどんどん卒業して、誰もいなくなった時、

指導員は、子どもたちのよく来る公園に行って「遊ぼう会」をしました。2週間に一回ぐらいのペースで、ドッジボールや鬼ごっこ、大縄跳びをして小学生と遊んでいる若者の姿に「どこかの宗教団体？」と胡散臭い目で見られながら、様子を見に来た親に語りかけていきました。父母会は親子料理教室を開いて参加してくれた親に少年団の良さを語るなどして、とりあえず団員になってくれるように働きかけました。

再建された少年団は、中学生が団長で、しっかりと運営委員会を開いて計画を立てながら、クリスマス会や楽しい行事の計画を持ってすすんでいます。

少年団の良さは、誰かが決めるのではなく参加しているみんなが話しあって決めること、だれもが対等で、自分の気持ちを十分聞いてもらえること、集団であそぶからのしいこと、異年齢だから自分のなりたい人のモデルが身近にいることなどが挙げられるのではないのでしょうか。

指導員さんも指導員会議を持って、子どもたちの指導

のやり方で話しあったり、自分たちだけでの楽しい計画を立てたり、他の地域との学習会で学んだりしています。

親も、仕事仲間でも隣近所でも無く、損得のない関係で、「ええ格好」をせずに関わりを持っています。また、親の知らない我が子の姿を指導員さんから聞かせてもらうのも楽しみの一つです。

「甘ったれでできかんの代表みたいだった子が少し頑張る子になりつつある。」「自分の好きなことしかやらなかった子が、少年団に毎週出て行っている。」「引っ込み思案だった子が団長に立候補した。」など子どもたちは安心して自分をさらけ出せる場で、話しあいと行事を重ねながら、自立や自律の道を歩んでいます。

特に小学校高学年から中学生の思春期には学校でも家でも見せない顔を見せてくれます。とても優しく小さな

子どもたちの面倒を見ている彼らを見ていると、みんなの中で確実に人間として大切なものを獲得していると安心します。

ある指導員は言っていました。「小さい子どもたちがじゃれついてくる。じゃれつかれるそんな自分が大好きだ。」と。

ある時、髪をみごとに金髪に染めてきた子に「どうして?」とたずねると「一度してみたかったんや。でも、茶髪で学校に行ったら、みんなは俺をそんなやつやと見る。少年団では格好でなくおれ自身を見てくれるから安心してできる。」

こんな言葉ができることが少年団の良さなんだと思います。

教育共同の力を確かめ ひろげよう

活動交流会、全国センター07年度総会ひらく

子ども全国センターは6月30日(土)、「教育共同の力を確かめひろげよう」活動交流会をひらき、60人が参加して有意義な交流が行われました。青年のデュオ「Topo & Ariel」が奏でる南米の音楽を楽しんだあと、中嶋博さん(早稲田大学名誉教授)の講演「子どもと日本の教育の未来～フィンランドの教育に学ぶ」を聴きました。講演は、二度と戦争をしてはならないという決意とともに、子どもと教育によせる固い信念に基づいた力強く感動的なお話でした。

また、各地・団体からの発言は、教育基本法の運動を引き継ぐ共同のひろがり、その大切さをあらためて確信させるものであり、私たちのこれからの活動を励ますものでした。(講演要旨後掲)

<フロア発言から>

フロアからは、子どもをめぐるさまざまな発言が出されました。「全国一斉学力テストの実施差し止めを求め、9人の子どもの代理人として京都地裁に申し立てた。感性豊かな子どもは、自ら考え乗り越えようとしている。(京都の母親)」「失敗しない子どもなんて気持が悪い。失敗することで学ぶ。突発型の重大な犯罪にはゼロトレ

ランスは何の役にも立たないばかりか、むしろそれを誘発しかねない。寛容さを是非持ってほしい。(自由法曹団)」「生活が大変で1日の食費が150円という学生。米を食べず、スパゲティに塩かけて食べれば腹いっぱい食えると言う。僕たちはこういう集会でがんばっている大人に会えるが、学生は大人を信頼していない。(全学連)」「日の丸・君が代をめぐる卒業式の事件以降、地域と教職員をつなぐとりくみをと連絡会ができた。P連の活動もむずかしくなっているが、先生を支えていきたい。(国立の子どもと教育を守る連絡会)」「学力テスト、貧困と格差など、学校で何が起きているのか。また、子どもに寄り添い悩みを聞いて成長を助ける教職員が過労死ラインを超えているという実態を“子どもの問題”として知らせていきたい。(都教組)」

このほか全生連、出版労連、元都立高校校長、七生養護学校支援にとりくむ住民などが発言しました。

活動の方針を確認 (総会)

活動交流会のあと引き続いて全国センターの07年度総会を持ち、主な活動の方針と代表委員・幹事会体制を確認しました。(活動方針の抜粋・要約は後掲)

子どもと日本の教育の未来 ～フィンランドの教育に学ぶ～

中嶋博さん（早稲田大学名誉教授、フィンランド科学アカデミー外国会員）の講演要旨（文責：編集部）

日本と対照的なフィンランド

「日本は大変な時代に来た」という思いだ。青年将校が内閣をのっとり、徴兵制がしかれ軍靴の音が忍び寄ってくるように思えてならない。教育基本法および教育3法が改悪されたねらいはなにか。先生をいじめ子どもの幸せを奪う、まさに管理教育の強化にほかならない。

日本では昨年1年間の自殺者のうち学生生徒は886人、統計を取り始めて以降最多である。生きることへの意欲を失い、問題解決をはかることに自信が持てないという深刻な状況にある。また景気がよいといわれる反面、相対貧困率は先進国の中でアメリカについて最悪（06年7月、対日経済審査報告書）。親の貧困が子どもの学力に影響を与えていると報告されている。これと全く対比的なのがフィンランドである。教育の管理ではなく教師の自主性を重んじ、子どもはのびのびと学び、自ら考え生きる力をつけている。大学生の出身階層は全く問題にならず誰でも入ることができ、高等教育進学率は73%である。国内総生産（GDP）に対する公教育費の割合は、日本はOECD30カ国中ビリから2番目で3.50%。最後がトルコ3.39%。フィンランドは5.89%、これでも北欧で最低なのである（06年度）。

「学力世界一」の背景

フィンランドは、OECDの調査（2003年実施、41カ国・地域が参加）で「学力世界一」になった。発表に際して日本では「応用力をはかるもの」と訳しているが、フィンランドは「今日のカリキュラムにおける得点が表されたのではない、明日の社会に生きる力がどのように身についているかをはかったものだ」といっている。また、日本では学校に登校している者を対象にしているが、12万といわれる小中学生の子どもが不登校。フィンランドには不登校はひとりもない。また読解力の分布でいうと、6段階のうち1、2（低い段階）の生徒が日本では7.4%に対して、フィンランドは1.1%、100人に一人しか極度に成績の悪い生徒はいない。日本の子どもは学習意欲が低いといわれるが、その前に日本では「落ちこぼ

れている」ことが大問題なのである。フィンランドではわからない子に十分な手当をしてすすんでいく。教え方の質が問題なのである。

新しい学力観の提起

暗記中心、受験のための学力は役に立たない。学力は包括的なものであり、学力の向上は競争によってではないのである。協働＝共に働く＝collaboration、すなわち一緒になって学ぶ、学ぶことを学ぶ、これが大切。私はこれにこだわるのである。

OECDは1997年以降あらたな取り組みに入り、2005年に確定した。DESECO（definition and selection of key competence）訳せば「キーとなる能力の定義と選択」というプログラムである。そこでの新しい能力（学力）とは、①道具の総合的な活用能力、具体的には情報技術や言語②異質な社会での関係能力、思いやり・寛容（寛容が学力なんです＝中嶋氏）、③自主的な行動能力、である。安倍内閣の「教育再生会議」の「学力論」ではこれが全部否定されている。真の学力として大切なのは、ゆとりある教育の大切さ、生きる力の大切さ、手をつなく協働の大切さ、寛容、許すことの大切さ。すなわち真の学力は、決して競争で培われるものではないのである。

成功の背景 総合制教育の勝利

かつては11歳の時に知能検査と国語と算数の成績によって、中学に行けるかいけないか将来が決まった。親が学費を出せるかどうかも重大であった。さまざまな教育改革の論議を経て、1962年の暮に北欧5カ国がスウェーデンにならって総合制学校をつくろうと約束した。フィンランドでは68年、国会で6・3制総合学校への移行を決めた。この6・3制は日本をモデルにして行われた。私は62年にフィンランドに行って以来、この改革に直接関わってきたが、70年代には、6・3制によって学力が下がったと攻撃もされた。しかし、「富士山にたとえてすそ野をひろげるほど頂点も高くなる、トップが頭角をあらわすものだ。時間がたてばわかる」といって耐えた。その後85年にOECDが審査し、フィンランドが6・3制

の総合学校に踏み切ったことを評価した。フィンランドの教育省はOECDの調査で好成绩をあげた背景として11の要因をあげている。①居住地、性別、経済状況などにかかわらず、教育に完全平等の機会。②地方での教育への接近の容易さ。学校は3 km以内につくることになっているが、雪が降って大変ならタクシー代は国が払う。③教育は全体的に無償。授業料、教科書代から給食費など無料。④性差別をしない。⑤総合制・非選別的な基礎教育。日本にまねて能力別学級編成をしたが、ねたみ・そねみを生むとってすぐにやめた。⑥支援的助言的柔軟な管理。91年、全北欧は学校の中央管理をやめ、教科書検定もやめた。⑦協働、助け合い学習。グループ学習が基礎。25人がさらにグループに分かれる。⑧学習への個人的支援と生徒の福祉。特別支援対応は見事である。⑨発達志向の評価と生徒の自己評価。学力テストは全国標準化のために抽出的にやり、公表はしない。平均より下がったところにはどんどん教師を送り込む。⑩高度の資質を備えた主体的教師。小学校からマスター号が必須。教師の自主性を尊重。⑪社会構成主義的な学習概念。個性は社会的構成によってのびるという確信。以上である。

3 大国家プロジェクト

3大国家プロジェクトを実施し、教育に惜しみなく金をつぎ込んでいる。①97年を読書年とし、国を挙げて読書力向上に努力。地域の図書館司書、作家や詩人を呼び児童文学を学校で教え、図書館を活用。②理数科向上プロジェクト。小学校1年生に数学する楽しさを教えたら、子どもたちが食いついてきたので、99年から6・3制をつなげた9年一貫制にした。しかも学習が足りないと思ったら自由に残れる10年制もある。その子どもの必要に応じて選ぶのであり、1年遅れることに何の不利益はない。③IT研修プログラム。就学前から成人学校に至るまでの全教師がITの上級資格を取った。

競争の原理でなく平等の原理

99年施行の基礎学校法で、競争の原理を否定し平等の原理を強調。一斉授業でなくグループワークを基本とし、教師は教壇で教えるのでなくグループの間をまわって相談にあずかるのが仕事である。テストによる競争・比較ではなく、生徒自身の評価であり毎日の発達強調の評価を重視する。さらに「落ちこぼれ」を防ぐための特別支

援教育システムが確立している。2004年の指導要領改訂で平和、民主、人権、共生教育の徹底、教科書の改善を実施。「教育は、人間的社会的成長をサポートし、そのために生きる知識と技術を付与するものである」「個人としての成長の尺度は何か、それは寛容である。個人の価値は寛容、許すこと」などを強調している。

どこまでも子どもが中心 サンタとムーミンの国

フィンランドでは子どもたちに「うそをつくるとサンタが来ない」と徹底的に教える。クリスマスにサンタ（学生アルバイト）が一軒々々訪ねてきて「あなたはこの1年、正直な子でしたか」とただし、正直に答えた子にプレゼントをあげる。決して豊かな国ではないが、子どもや高齢者を優先し乏しきを分かちあう。公共図書館網の整備はすばらしい。人口540万人に948館（2000年）。図書の貸し出し数は日本の5倍。勉強が楽しい国、本を読むことが楽しい国である。企業がバックアップし、「お父さんは1時間早く帰って、子どもに読み聞かせをしてください」と。マスメディアが協力し、暴力番組は流さない。子ども番組は5～6時台。北欧では1976年に「子どもへのテレビの影響を排する」という決議をあげている。フィンランドはムーミンの国。これは文化観の問題になると思うが、日本のような好ましくない番組は全くない。しかし法律などによる規制はなく、全く自由である。検閲があるわけではないが、有害なものは自主的に排している。

おわりに

今こそ教育において平等化を促進し、方法として協働を採用すべきではないか。学力向上の方途としてこれは国際的に認められ、フィンランドに教えられたところ少なくない。日本はつらい試練がこれから続くと思う。しかし希望はある。じっと耐え、明るい明日を待ち望みたい。我々は必ず勝利する時がくる、その時まで頑張りましょう。



講演する中嶋博さん

子ども全国センター 07年度の主な活動 (抜粋・要約)

◆ 憲法を守り、改悪教育基本法の具体化に反対する運動に全力をあげます

- ・憲法改悪を許さない運動に全力をあげます。
- ・「〇〇九条の会」など、草の根からの運動を強めます。
- ・改悪教育基本法、教育改悪3法の具体化に反対する幅広い共同のために積極的にとりくみます。
- ・「憲法・1947教育基本法を生かす全国ネットワーク」の事務局の一員として、そのとりくみを発展させます。

◆ 国民の共同で子どもを守るとりくみを強化します

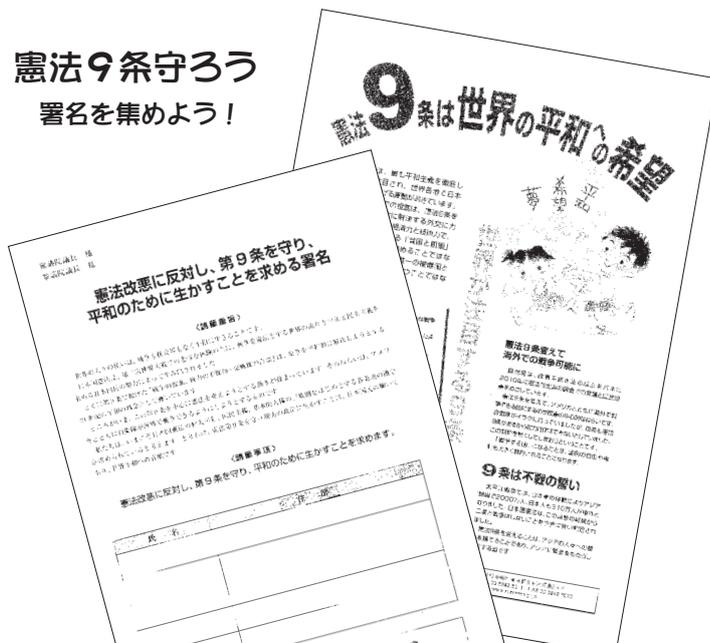
- ・地域における共同組織と全国センターの連携を強化します。地域での子どもをとりまく共同を強め、「子どもの権利・教育・文化 地域センター」を多様な形で確立・強化します。
- ・「子どもと教育を語るつどい」を1月に開催します。また、可能な地域で、全国センターと共同で企画・共催する「子どもを語るつどい」の開催を促進します。
- ・全労連をはじめ労働組合などと青年の雇用・労働・ルールある社会をつくる問題などでの連携を強めます。
- ・「教育のつどい2007」に主催団体として積極的にとりくみます。
- ・子どもの権利条約「第3回報告書をつくる会」のとりくみに積極的に参加し、協力します。
- ・子どもの権利条約を日本社会に生かすよう、日本政府に対すとりくみを強めます。
- ・子どもの権利条約を子どもたちに知らせるとりくみをひろげます。
- ・子どもをとりまく文化・メディアの改善を求めるとりくみをすすめます。
- ・教科書問題、サッカーくじ、教育行政による教育介入などについて共同の議論ととりくみをひろげ、必要に応じて文科省・地方教育行政への要請などを行います。
- ・少年法「改正」法案の問題点を明らかにし、日弁連とともに改悪に反対すとりくみを強めます。

◆ 全国センター組織を強化し活動をひろげます (略)

子どもの権利条約 「基礎報告書」の 締め切りを変更

昨年5月に国連子どもの権利委員会へ提出予定だった「第三回政府報告書」は、いま現在、いつ提出されるのか全くわかりません。したがって、各団体・個人が思いの丈を綴る基礎報告書の締め切りも大幅に遅らせます。子どもやおとなの実態をつぶさに書いて、**12月20日までに**子ども全国センターに届けてください。詳細はおってお知らせします。

憲法9条守ろう 署名を集めよう!



全教、教組共闘、子ども全国センター、憲法・教育基本法全国ネットの4者による国会請願署名をはじめます。署名用紙は無料(送料のみご負担を)で送りますので、注文してください。